

豊かな言語生活を営む生徒の育成

～「建設的に批判する力」の育成を通して～

林 涼 子〔鹿児島大学教育学部附属中学校〕

Study of the constructive critical ability in Japanese for enrichment of students' language life

HAYASHI Ryoko

キーワード：建設的に批判する力、分析、比較、創造、話し合い

I はじめに

言葉は、すべての思考及び情緒の基盤となるものである。人は、思考した結果を言葉に表すだけでなく、言葉を用いて思考する。また、感受性や判断力も言葉を媒体にして育つものである。

国語科の授業では、学習者に思考や情緒の基盤となる言葉を確実に身に付けさせ、それを適切に、また、情緒豊かに使えるようにすることが大切である。

一方、現代の小中学校では、「きもい」「うざい」のように相手を傷つける言葉の多用や「びみょう」「ふつう」のように単語による会話のやり取りなどが多くの生徒に見られるようになり、問題視されるようになって久しい。携帯電話等の普及は、それに更に拍車をかけ、絵文字や記号による会話のやり取りが頻繁に行われているという実態が見られる。それにともない、自分の思いを相手に伝えるために言葉を駆使して表現したり、相手の思いを汲み取ろうと表現をじっくり吟味し、味わおうとしたりする態度が育ちにくくなっている。そのため、コミュニケーション能力の低下や人間関係形成能力の低下も国語力に関する問題点の一つであるとされている。

このような現状から、国語科の授業を通して、言葉を適切に、豊かに使う力を身に付けさせることによって、豊かな情緒を育み、よりよい人間関係を築いていくことができる生徒を育てたいと考え、本研究主題並びに副主題を設定し、研究に取り組むことにした。

II 研究仮説

自他の表現を建設的に批判する力を高めることによって、相手や場に応じて適切に表現する力を高め、豊かな言語生活を営む生徒を育成することができる。

III 研究主題、副主題について

1 研究主題について

(1) 「豊かな言語生活」とは

「豊かな言語生活」を以下のように捉えた。

- ① 多様にあふれる情報や情報の伝達手段に対応しながら、伝えたいことを適切に伝える力を発揮している言語生活のこと。
- ② 言葉に込められた「思い」を想像したり、理解したりしながら受容的に受け止め、建設的に批判し合いながら高め合う言語生活のこと。

なお、このような言語生活を営む生徒の姿を以下のように捉えた。

<①に対応する生徒の姿>

- 状況や場に応じた言葉の使い方ができる。
- 相手や目的に応じた言葉の使い方ができる。
- 伝達手段に応じた言葉の使い方ができる。
- 双方向の伝え合いができる。

＜②に対応する生徒の姿＞

- 自分の「思い」を適切に伝えることができる。
- 相手の「思い」を汲み取ることができる。
- 自他の「思い」を生かしながら建設的な話し合いをすることができる。

(2) 豊かな言語生活を営む生徒を育てるために

本研究では、豊かな言語生活を営む生徒を育てるために「建設的に批判する力」に焦点を当てることにした。

自他の表現をより適切に、より豊かにするためには、それらの表現を客観的に評価し、改善していくことが大切である。評価し改善するためには、現状を正確に理解するとともに、そこからよりよいものを創造していかなければならない。

そのためには、まず、自他の表現を的確に批判する力を高める必要があると考える。

このようなことから、「建設的に批判する力」を高めることを通して、豊かな言語生活を営む生徒の育成に努めたいと考える。

2 副主題について

(1) 「建設的に批判する力」とは

日常生活の中で多様な情報を容易に受信したり発信したりできる現代では、その情報を常に正しいもの、十分なものとして受けとめがちである。また、様々な情報機器の普及により、用件だけを端的に述べたり記号や絵を使って象徴的に表現したりすることが当たり前になりつつある。そのため、私たち日本人が古来から大事にしてきた、相手を思いやり、尊重する気持ちや、相手の思いを察する力、相手に思いを伝えるために言葉を選び、駆使しようとする態度などが失われつつある。

そこで、相手の気持ちを思いやって言葉を使おうとする態度や、自分の思いや考えを語句や表現技法等を駆使して伝えようとする態度の育成が重要な課題となっている。この課題に対応するためには、自他の言語生活を豊かにしようとする視点から、よりの確な表現、より豊かな表現を追究し続ける力を高める必要がある。

ここでは、このような力を「建設的に批判する力」と捉えることにした。

(2) 建設的に批判する力を高めるために

私たちは、批判をするときには、一般的に、相手の欠点や弱点を探しがちである。また、批判し合ううちに感情論になりがちであることから分かるように、批判する際には主観的に物事を捉えてしまいがちである。

しかし、情報を適切に受信したり発信したり、言葉に込められた自他の思いまでを表現したり理解したりするためには、自他の表現を客観的に捉え、確かな観点をもって分析し、よりよい方向を探る必要がある。

そのために、ここでは、「比較する」という言語活動を重視することにした。複数のものを比較するということは、ある観点をもってそれぞれの表現を分析することであり、分析した結果を相対的に捉えるということである。従って、自他の表現をより客観的に、また、焦点を絞って捉えることができるものと考えられる。

IV 研究の視点

本研究では、「建設的な力を高める」という視点から以下の点に重点をおいて授業を創造し、仮説の検証を行うことにする。

- (1) 教材の開発
- (2) 「比較」を生かした学習活動の工夫
- (3) 建設的な話し合いを促す学習活動の工夫

V 研究の実際

ここからは、本年度5月に3年生で行った授業を基に、研究の実際について述べることにする。本授業の単元名、教材等は以下の通りである。

【単元名】 比較して読もう

【教材】

- ・「冥王星が『準惑星』になったわけ」(三省堂)
- ・「冥王星『降格』」(朝日新聞 2006年8月25日)
- ・「地球は君を忘れない」

(朝日新聞 2006年8月26日)

1 単元設定の理由

現代では情報伝達手段が多様化し、誰でも、いつでも、様々な情報を入手できるようになった。特に、インターネット等を活用した情報の収集や伝達は、迅速かつ容易にできるため、多くの人に利用されている。一方、新しい情報や多様な情報を次々に入手できる分、情報の真偽や公平さについて考えたり、ある情報について時間をかけて咀嚼し、自分なりの意見や考えをもとうとしたりする態度が育ちにくくなってきている。また、インターネット等では、情報の発信者が漠然としている場合が多く、誰が、何のためにその情報を発信したのかを認識しづらい。そのため、「相手」の目的や意図を無視した独りよがりな解釈も起こりかねないという現状がある。

このような状況は中学生も例外ではなく、多くの生徒が、自分が入手した情報が正しいと思い込み、鵜呑みにしてしまう傾向にある。また、一つの情報で満足してしまい、他の捉え方はできないか調べたり、発信した人の目的や意図を理解した上で情報を取り入れようとする姿勢に欠ける傾向にある。さらに、図書の本や新聞等、活字による情報より、テレビ等の映像や音声による情報や、インターネット等による簡略化された情報を受け入れやすいという傾向も見られる。

そこで、「新聞記事と新聞記事の比較」や「説明文と新聞記事の比較」を通して、同じ情報でも相手や目的や意図に応じて取り上げる事柄や書き方が異なることに気付かせ、自分の目的や必要に応じて情報を収集・選択しようとする態度を育成するとともに、その情報の真偽等について判断したり自分なりの意見をもったりしながら読む能力を高めさせたいと考えて本単元を設定した。

また、建設的に批判する力を高めるためには、「比較する」という言語活動は大変有効である。ただし、漠然と比較しても得るものは少ない。そこで、教師は、何のために、何を、どのように比較させるのかを明確にした上で授業を創造する必要がある。そうすることによって生徒は、必然的に文章を分析しながら読み、共通点や相違点を見出していくことができるのである。

このように、共通点や相違点を見出し、その理由を探り、どちらがより適切かなどを判断する過程で、生徒はそれぞれの文章を建設的に批判することになる。

2 教材の開発

(1) 教材となる文章の見出し

ここで使用した教科書教材「冥王星が『準惑星』になったわけ」(渡辺潤一著 三省堂)は、2006年夏、ブラハで行われた国際天文学連合(IAU)で決議された「冥王星は、惑星と別に新しく設けられた『矮惑星』というジャンルに入る」という決定を受けて、その理由や天文学の発展から見た意義について、天文学の歴史をひもときながら説明した文章である。

本教材は、人間が太古の昔から眺め、憧れてきた星々について、飽くなき探求心をもって解明してきた多くの天文学者の研究の軌跡を追ったものであり、天文学に興味・感心のない者にとっても魅力的な題材と言えるものである。

しかし、専門用語や人名、星の名前等が多く、語句の意味を理解するのに一苦労する文章でもある。また、発展の歴史が年代ごとに書かれているため、その情報量の多さが難解な文章という印象を与えてしまっている。

さらに、教科書で「比較」を目的に提示された他の文章は、それぞれの文章の違いを大ざっぱに捉えることはできるが、分析しながら読むための「観点」を見出しにくいものである。

そこで、建設的に批判する力を高めるためにより適した教材として、資料1・2の文章を用いることにした。これらは、同じ新聞社の記事であるが、一方は一面の記事、一方は社説であることから、同じ話題を取り上げているにも関わらず、論調が明らかに異なっている。つまり、資料1は、ニュースとして事実のみをより迅速に的確に伝えるために書かれたものであり、簡潔で正確であることが重視されている。資料2は、社説として、新聞社なりの考えや意見を織り交ぜた文章であり、書き手の主観が働いていることが明確に分かる語句や表現(「気の毒」「しのびない」「ジレンマから」「私たちのふるさとである太陽系」等)が多用されている。

【資料1】

冥王星「降格」

総会に提示された四つの決議案の採決の結果、冥王星は、惑星と別に新しく設けられた「矮惑星」というジャンルに入ることになった。冥王星を含む海王星以遠の天体を総称して「プルートニア」(冥王星族)と「矮惑星」と呼ぶ決議案は、否決された。太陽系の惑星の定義は、「太陽の周りを回り、十分重いため球状で、軌道近くに他の天体(惑星を除く)がない天体」とされた。

これは、近くにあった天体のほとんどを吸収して、軌道上で圧倒的に大きな重さを占めるようになった天体という意味し、定義の脚注で、「水金地火土天海」の8個のみと明記された。

矮惑星は「太陽の周りを回り、十分重いため球状だが、軌道近くに他の天体が残っている、惑星でない天体」と定義され、近くに同程度の小天体が多数見つかっている冥王星は、その代表と位置づけられた。

矮惑星には冥王星のほか、米観測グループが昨夏「第10惑星」と発表した「2003 UB313」、火星と木星の間にある小惑星で最大の「セレス(ケレス)」などが含まれる。

当初案では、惑星を「自己の重力で球形を保ち、恒星の周りを回る恒星でも惑星でもない天体」などと定義し、専門家の間で「本当に惑星といえるのか」と議論のあった冥王星だけでなく、冥王星の衛星とされてきたカロン、第10惑星、セレスも含めて12個に増やすとした。しかし、反対意見が続出、修正案がつくられていた。(朝日新聞 二〇〇六年八月二十五日より)

【資料2】

地球は君を忘れない

太陽系に惑星は九つ。一番遠い惑星は冥王星。そんな常識が、約80年ぶりに変わる。

国際天文学連合(IAU)があいまいだった惑星の定義を整理し、冥王星がそれにあてはまらなくなったためだ。

IAU総会が開かれたブラハには、日本人も含めて世界のメディアが詰めかけ、「惑星降格」などの大見出しで報じられた。まるでスキヤンドルの責任でも取られたかのようで、冥王星にはちよつと毒をかけた人になった。天体の「処遇」がなぜこれほど関心と呼ぶのか。首をかしげた人が多かったかもしれない。だが、天文学にとって、私たちのふるさとである太陽系の成り立ちには最大のテーマの一つなのだ。

1930年に発見された冥王星はあまりに遠くてよくわからなかったが、この30年ほどで観測が進み、変わり者が明らかにになってきた。地球のより小い小惑星、軌道もほかの惑星に比べてぐんと傾いている。地球のような岩石でできた惑星や、木星のようなガスの惑星とも違い、水でできている。これで本当に惑星といえるのか、そんな疑問が出されていた。

冥王星の周辺には、似たような水の天体が数多くあることもわかってきた。05年、冥王星より大きい天体が確認され、ついに放っておけなくなった。冥王星が惑星なら、こちらも惑星とせざるを得なくなるからだ。

今回の総会では、それらもひっくるめて惑星とする案も出された。だが、これだと惑星は将来、何十にも増えてしまう可能性がある。かといって、慣れ親しんできた冥王星をはずすのはしのびない。天文学者もやはり人の子である。そんなジレンマから議論は沸騰した。

惑星の定義に関する最近の学説からすれば、冥王星はどうにも異質だ。結局、この意見が大勢を占め、太陽系の惑星は八つとすることで決着した。冥王星などは「ドワーフ惑星」という別名称で呼ばれることになった。正式な日本語名はこれからだ。若干の意識は恐れず、「豆惑星」と呼ぶのはどうか。

新しい発見があれば、認識を改めるのは当然のことだ。宇宙観も変わっていく。科学はこうして進んできた。

とはいえ、しばらくは混乱もあるだろう。地球のきょうだいとしての冥王星は、私たちの文化に深く根を下ろしているからだ。

教科書を始め、数多くの書物が書き直しを迫られる。子供に聞かれて困る親も多いだろう。宇宙もののアニメ作品はどうすればいいのか。占星術の世界も大騒ぎだ。

米国の宇宙探査機「ニューホライズンズ」が、冥王星をめざして飛んでいる。9年がかりの旅で15年に到着する予定だ。新名称で呼ばれる星の探査は初めてのことから、未知との出会いがいつそう楽しみにいった。

(朝日新聞 二〇〇六年八月二十六日より)

(2) 見出した文章の教材化

この二つの文章も見慣れない語句が多く、このままでは、教科書教材ほどではないにしても、読むことに抵抗を感じる生徒が多く見られるものと予想される。また、比較させるには、文章の長さが著しく異なり、情報量に差が見られる。さらに、どことどこを比較すればよいのかが一見しただけでは捉えにくい。そこで、教材として用いるために次のような手立てを行うことにした。

【教材化のために】

- ① 文章をできるだけ同じ長さにするために、内容の理解に支障のない範囲で資料2の後半部分を省略する。
- ② 比較しやすくするために、資料1・2で書かれてあることができるだけ同じ内容になるように段落分けをする。(ただし、文章そのものはそのままなので、すべて同じようにはならない。)
- ③ 文章を上下に並べ、視覚的に比較しやすくする。

①～③を踏まえて作成したワークシートが、資料3である。生徒には、意図的に新聞社の名前等を伏せる必要があったため、ワークシートには、

引用元は記入していない。その代わり、授業の最後で、新聞社名、発刊された年月日、それぞれ一面の記事と社説の一部であることを知らせた。

【資料 3】

【二つの文章を比較しながら読もう】

① 総会に提示された四つの決議案の採決の結果、冥王星は、惑星と別に新しく設けられた「矮惑星」というジャンルに入ることになった。冥王星を含む海王星以遠の天体を総称して「プルトニアシ（冥王星族）天体」と呼ぶ決議案は、否決された。

2 太陽系の惑星の定義は、「太陽の周りを回り、十分に重いため球状で、軌道近くに他の天体（衛星を除く）がない天体」と吸収された。これは、圧倒的にあった天体のほとんどを占めるようになった天体を意味し、定義の脚注で、「水金地火木土天海」の8個のみと明記された。

③ 矮惑星は「太陽の周りを回り、十分重いため球状だが、軌道近くには他の天体が残っていない、衛星がない天体」と定義され、近くに同程度の小天体（トイ・プラネット）が多々見つかっている冥王星は、その代表と位置づけられた。矮惑星には冥王星のほか、米観測グループが昨夏、「第10惑星」と発表した「2003 UB313」、火星と木星の間にある小惑星で最大の「セレス（ケレス）」などが含まれる。

4 当初案では、惑星を「自己の重力で球形を保ち、恒星の周りを回る恒星でも衛星でもない天体」などと定義し、専門家の間で「本当に惑星といえるのか」と議論のあった冥王星、第10惑星、冥王星の衛星と議論のあったカロン、第10惑星、セレスを含めて12個に増やすとした。しかし、反対意見が続出、修正案がつくられていた。

太陽系に惑星は九つ。一番遠い惑星は冥王星！。そんな常識が、約80年ぶりに変わる。国際天文学連合（IAU）が、約80年ぶりに変えた惑星の定義を整理し、冥王星がそれにあてはまらなくなったためだ。

2 IAU総会が開かれたブラハには、日本も含めて大見出しのメディアが詰めかけ、「惑星降格」などの責任でも取られたかのように、まるで冥王星やクイパーベルトの天体への扱いが問題になった。一方、天文学界の多くは、太陽系の成り立ちには最大の影響を与えてきたものの、惑星としての地位を失ったことを残念に思っている。だが、天文学界の多くは、太陽系の成り立ちには最大の影響を与えてきたものの、惑星としての地位を失ったことを残念に思っている。

星お冥氷がる木傾よがく
とけ王の出。星いりて
せな星天さこのて小みよ
ざくよ体れれよいさ、く
るなりがてでうるい変わ
るをつ大数い本な。しわか
を得さき多た当ガ地。りら
な。いく。にス球軌者な発
く冥天あ冥惑のの道ぶか
な王体る王星惑よもりつ
なる星がこ星と星うほりが
かが確とのいとなか明がた
ら惑認め周えも岩のら。冥
だ。星さわ辺の違石惑かこ
なれかにのいで星にこ星
ら、つはか、でにな30は、
いつて、氷き比つ年、
こいに似そでたててほあ
ちにたたんで惑てきど
ら放。よなき星がでり
つ、05年。疑てやん。観
惑て、な問い、と月測遠

4 今回の総会では、それらもひつくるめて惑星と
する案も出された。だが、これだと惑星は将来、
何十にも増えてしまふ可能性がある。かといつて、
慣れ親しんでしまふ冥王星をはずすのはしびな
い。天文学者もやはり人の子である。そんなジ
レンマから論議は沸騰した。(略)

また、生徒の読解に対する抵抗を少なくするために、読みにくい漢字、日常生活であまり目にしない漢字にふりがなを打った。さらに、話題に対する抵抗を少なくするために、単元の導入時に惑

星の名前や地球との位置関係、それぞれの惑星の特徴などについて確認した。その際、太陽系や惑星の軌道を記した写真、冥王星についてのDVDなども活用し、生徒に理解させた。

3 「比較」を生かした学習活動の工夫

(1) 単元の目標、評価規準、指導計画

【単元の目標】

- (1) 複数の文章を積極的に比較し、それぞれの文章の語句の用い方や書き方の工夫を捉えることによって、文章の要点や筆者の主張、目的や意図に応じた書き方等について理解しようとするができる。
- (2) 複数の文章を、文脈の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫について比較しながら読み、目的や意図に応じた表現の仕方について理解を深めることができる。
- (3) 文章を読んで自然の摂理やそれを解明しようとする人間の努力のすばらしさに触れ、人としての生き方に対する考えを深めることができる。

【評価規準】

評価の観点	評価規準	学習指導要領との関連
国語への関心・意欲・態度	① 二つの新聞記事の比較や新聞記事と説明文の比較を通して、それぞれの特徴や書かれた目的や意図を進んで捉えようとしている。 ② 筆者の表現の工夫に注意しながら説明文を進んで読み、要点や筆者の主張、文章の展開や構成の工夫を捉えようとしている。	
読む能力	③ 二つの新聞記事と比較し、それぞれ目的や意図に応じて用いる語句や表現の仕方が工夫されていることを理解している。 ④ 説明文において、伝えたいことを分かりやすく表現するために、構成や展開、表現の仕方等が工夫されていることを理解している。 ⑤ 説明文に書かれた内容を理解し、自然の摂理やそれを解明しようとする人間の努力のすばらしさに触れ、人としての生き方について考えを深めている。 ⑥ 新聞記事と説明文を比較しながら読み、目的や意図に応じて表現の仕方が異なることを理解し、自分の表現に生かそうとしている。	ア 語句の効果的な使い方、表現の工夫 ウ 文章の構成や展開、表現の仕方等 エ 自分の意見をもつこと

【単元の指導計画（全8時間）】

過程	主な学習活動	時間	指導に当たっての手立て	評価
導入	1 単元を概観し、複数の文章を比較しながら読み深めていく学習であることを確認する。 2 説明文や写真等を基に、太陽系の惑星について知る。	1	・ 話題や用いられている固有名詞等に対する抵抗を少なくするために、教科書教材「冥王星が『準惑星』になったわけ」をCDで聞かせたり、写真等を用いて惑星について理解させたりする。	評価規準①（観察）
展開	3 二つの新聞記事と比較し、その記事が書かれた目的や意図を探る。 4 「冥王星が『準惑星』になったわけ」を読み、惑星についての研究の歴史や、文章の構成や展開、語句や写真の用い方等について捉える。 (1) 文脈に沿って大まかな年表を作り、天文学の歴史についてまとめる。 (2) 冥王星が準惑星になった理由についてまとめる。 (3) 筆者の主張や表現の工夫やそれらに対する自分の考えをまとめる。	2 20 3	・ 同じ新聞社の一面の記事と社説を比較させることによって、同じ話題でも、目的や意図に応じて取り上げる事柄や書き方が異なることを理解させる。 ・ 天文学の歴史をより確かに理解させるために年表を作らせ、誰がどのような技術の基に何を発見したのかを分かりやすくまとめさせる。 ・ 「複雑な問題」「恐れていた事態」などの語句に着目しながら、冥王星が準惑星になった理由をまとめさせる。 ・ 最後の段落の意味を考えさせ、筆者が読者に伝えたいことを捉えさせる。 ・ 文章の展開の仕方等に注目させ、筆者の表現の工夫を捉えさせる。 ・ 天体に関わる研究に多くの人と時間が費やされていることに着目させ、人としての生き方のすばらしさに気付かせる。	評価規準①②③（発表・観察・ワークシート） 評価規準②④⑤（発表・観察・ノート）
開	5 二つの新聞記事と説明文を比較し、それぞれの文章の果たす役割について話し合う。	1	・ 三つの文章を比較させることによって、読み手や書く目的や意図が異なるために内容や表現の仕方が異なることに気付かせる。	評価規準①⑥（発表・観察・ワークシート）
終末	6 学習を振り返り、目的や相手に応じた文章の書き方についてまとめる。	1	・ 比較して分かったことをまとめることによって、情報を収集・選択する際に注意すべきことを理解させる。	

(2) 「比較する」活動の設定

本単元では、「比較する」活動を二箇所設けた。一つめは、「主な学習活動3」の「二つの新聞記事を比較し、その記事が書かれた目的や意図を探る」活動である。二つめは、「主な学習活動5」の「二つの新聞記事と説明文を比較し、それぞれの文章の果たす役割について話し合う」活動である。(P160【単元の指導計画】参照)

「二つの新聞記事の比較」では、同じ情報でも相手や目的や意図に応じて取り上げる事柄や書き方が異なることに気付かせ、自分の目的や必要に応じて情報を収集・選択しようとする態度を育成するとともに、その情報の真偽等について判断したり自分なりの意見をもったりしながら読む能力を高めることをねらいとしている。

「二つの新聞記事と説明文の比較」では、中学生を対象として書かれた説明文と不特定多数の人を対象として書かれた新聞記事という、相手や目的だけでなく、情報量や書き方まで大きく異なる三つの文章を比較させる。そうすることによって、読み手や目的や意図が異なると取り上げる事柄や書き方が異なることを実感させることをねらいとしている。

このように、いくつかの情報を比較することを通して、生徒は、自分の目的や必要に応じた情報の収集や選択が大切であることを体感するものと考えている。

また、観点を明確にして比較させることによって、それぞれのよさを捉え、取り上げられた事柄や表現の仕方の適否、正誤、美醜等について、自ら思考し、判断することができるようになるものと考えている。

(3) 比較のさせ方

資料3にある二つの文章を読むためには、「共通点や相違点を探しながら読み比べる。」というアプローチの仕方が一般的である。しかし、ここでは、「もし、自分が新聞記者だったらどちらの文章を書きたいか。」という問いを投げかけた。漠然と共通点と相違点を探すよりも、「自分だったらどちらの文章を書くか。」「それはなぜか。」という問いに答えるために文章を読む方が、切実に語句や表現に着目すると考えてのことである。

また、二つの文章を分析する際に、書き手としての立場に立たせることによって、生徒は、「なぜ、この題材が取り上げられたのか。」「なぜ、この語句や表現が用いられたのか。」等について考察することになり、書き手の目的や意図に深く迫ることができるからである。

実際に、本授業を実践した結果、生徒は、書き手の立場、読み手の立場の両方から文章を分析していた。また、授業の終末における感想を発表する際にも、「文章を書く際には読み手や目的を考えて表現の工夫をしたい。」「文章を読む際には、書き手の目的や意図を考えながら読みたい。」という両方の立場からの感想を述べていた。

実際に、本授業を実践した結果、生徒は、書き手の立場、読み手の立場の両方から文章を分析していた。また、授業の終末における感想を発表する際にも、「文章を書く際には読み手や目的を考えて表現の工夫をしたい。」「文章を読む際には、書き手の目的や意図を考えながら読みたい。」という両方の立場からの感想を述べていた。

4 建設的な話し合いを促す学習活動の工夫

(1) 同じ立場の者同士による話し合い

生徒に話し合いに積極的に参加させるためには、自分の意見をしっかりと持たせるとともに、その意見に対するある程度の自信をもたせる必要がある。また、大人数で話し合うよりも少人数で話し合うときの方が、活発な話し合いになりやすい。

そこで、二つの文章を比較し、「自分だったらどちらの文章を書きたいか。」という視点から分析させた後、同じ文章を選んだ者同士で4人～5人のグループによる話し合いを行わせた。生徒は、この話し合いを通してその文章を選んだ理由が友達と同じであることが分かり、自信をもったり、他の理由に気付いたりすることができた。

(2) 話し合った結果の表出

グループで話し合いをした後、それをどう発表させるかによって、話し合いの成果が大きく異なると言っても過言ではない。そこで、グループで



【写真1 二つの文章の分析】



【写真2 グループでの話し合い】

の話し合いを最大限に生かす工夫が必要である。

そのためには、グループでの話し合いで分かったことを、全体で共有する場が必要になる。そのために、写真2や写真3にあるような小黒板を用い、「その文章を選んだ理由としてより説得力のあるもの」を書かせることにした。



【写真3 グループ相互の比較】

小黒板を利用するよさは、各グループで話し合った内容を一斉に見、比較することができるという点にある。また、黒板に張り出せば、必要

に応じていつでも見ることができるというよさもある。本授業では、それぞれの小黒板に書かれた内容を比較させ、自分たちとの共通点と相違点を捉えさせた。

(3) 全員による練り上げ

本授業で[A]の文章を選んだ生徒は、5名、[B]の文章を選んだ生徒は、34名であった。そこで、全体による話し合いを始める際に、「5人で他のグループの人たちの考えを変えて仲間を増やそう。」という呼びかけと「相手は5人しかいないから、その人たちも自分たちの仲間として巻き込もう。」という呼びかけを行った。相手を納得させ、自分たちの意見に賛同させるためには、説得力のある根拠を発表しなければならないからである。

このような働きかけを行ったことによって、他者の意見をしっかり聞き、自分の考えと比較しながら話し合いに臨む生徒の姿が見られた。

また、相手を説得するためには、相手の意見に反論したり、その意見を更に発展させた意見を述べたりしなければならない。そのため、生徒たちの話し合いは、必然的に「〇〇君はこう言ったけれど、それは〇〇ではないか。」とか「〇〇さんの意見は確かに正しいと思うが、〇〇という考え方もできるのではないか。」などといった、互いの考えを認めつつも、更によりよい考えに高め合う話し合いになっていった。また、話し合いの中で多様な視点からの意見が出され、話し合いに広がりや深まりが見られた。

このように、相手の意見を基に更に自分の考えを広げ、深めていく話し合いがなされていたことから、建設的に批判する力の高まりを見てとることができたように思う。

以下に、全体での話し合いの一部を記す。

- S 1：新聞とか読んで思うんだけど、難しくて辞書を引かないと分からない言葉が多いと読む気にならないので、専門用語などをあまり使っていない[B]の方がいいと思います。
- S 2：僕は新聞はたくさんの人が読むので、内容が伝わらないといけないから、専門用語などが少なく分かりやすい[B]の方がいいと思います。
- S 3：私は[A]を選んだんですけど、[A]は確かに専門用語など難しいと感じる言葉が多いですが、矮惑星に冥王星がなったという話題なのに、[B]には矮惑星という言葉は一回も出てこないで説明が不十分だと思います。[A]に書いてあることは主に固有名詞なので、難しいというよりは具体的に書いてあるだけだと思います。[B]は、固有名詞が他の言葉に置き換えられていて分かりやすいと言えば分かりやすいんですが、[B]にも「処遇」とか「スキャンダル」など難しい言葉は使われているので、難しさから言うとならないと思います。
- S 4：新聞とは人に多くの知識を与えるものです。分かりにくい言葉を使っているとS 1君が言いましたが、ブルートニアンなどの専門用語はニュース番組などで話題になったときに知らないとまったくついていけません。だから、まず[A]を読んで、ある程度知識を蓄えることが大事であり、その意味で、[B]は新聞記事としては適していないと思います。
- S 5：S 4君に対する反論なんですけど、2003UB 313とかブルートニアンなどの言葉が分からないとあったんですけど、ニュース番組などは、みんなに内容が分かるように伝えるものなので、2003UB 313などのようにあまり日常で使わない言葉は最初に説明があると思うので話題についていけないということはないと思います。天文学を詳しく知りたい人にとっては専門用語は必要だけど普通の人が読んだときに、この記事は冥王星のことを言っていると思うので、他の星の名前が出てきても分からないので、冥王星のことを伝えるんだったら、[B]の文章でもいいと思います。

(S 1～S 5は生徒を指す。)

VI 考察並びに研究の成果と課題

(1) 考察

次ページのグラフ1・2や「主な理由」から分かるように、[B]の方が生徒にとって、身近で親しみやすい文章であることが分かる。また、「おもしろく読めた」と答えた生徒は、[A]より[B]の方がはるかに多い。しかし、別の質問では、[A]の文章だけ読むと難解と感じるが、[B]の文章と比較することによって、読みやすくなったと答えた生徒も多く見られた。

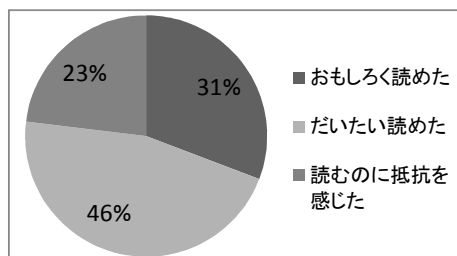
また、グラフ 3・4 と「主な理由」を見ると、「とてもおもしろかった」「学びやすかった」と答えた生徒は半数を超え、逆に「おもしろくなかった」と答えた生徒は 1 名、「学びにくかった」と答えた生徒は 0 名である。ここで、注意したいのは、「読むのに抵抗を感じた」と答えた生徒も、二つの文章を比較するのは「とてもおもしろかった」「まあまあおもしろかった」「学びやすかった」「まあまあ学びやすかった」と答えている点である。さらに、「比較するよさ」について聞いたところ、多くの生徒が、「共通点や相違点、それぞれの特徴やよさを捉えやすい。」「表現の工夫が分かりやすい。」と答えており、一つの文章を読むよりも、複数の文章を比較しながら読む方が、それぞれの特徴やよさが際立ち、書かれてある内容はもちろんのこと、表現の工夫までも捉えることができるということを実感している。

【資料 4 授業後の調査結果】

調 査 日：平成24年 5 月28日（月）
 調査学級・人数：附属中学校 3 年 4 組・39 名
 調査方法：質問紙法

問 1 「A」・「B」の文章はおもしろく読めたか。

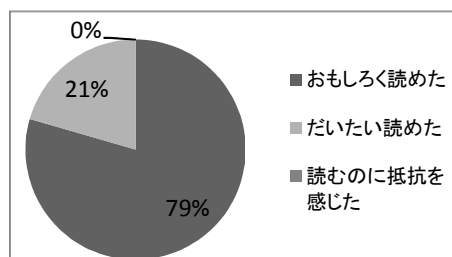
【グラフ 1 「A」について】



【主な理由】

おもしろく読めた (12名)	・定義などが詳細に書かれてある。 ・詳しく書かれ、新しいことをたくさん知ることができた。
だいたい読めた (18名)	・難しい語句が多く、読みにくかった。 ・難しい言葉は多いが、意味は理解できた。 ・短い文で多くの情報を受け取ることができた。
読むのに抵抗を感じた (9名)	・難しい言葉ばかりでおもしろくなかった。 ・専門用語が多く、読みにくかった。

【グラフ 2 「B」について】

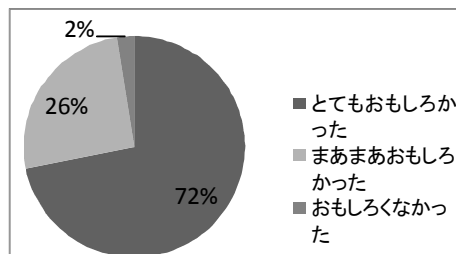


【主な理由】

おもしろく読めた (31名)	・表現の工夫がおもしろく分かりやすかった。 ・筆者の考えも書かれていて自分の考えをもちやすかった。
だいたい読めた (8名)	・易しい言葉で書いてあり分かりやすかった。 ・身近に感じられた。
読むのに抵抗を感じた (0名)	なし

問 2 二つの文章を比較するのはおもしろかったか。

【グラフ 3】

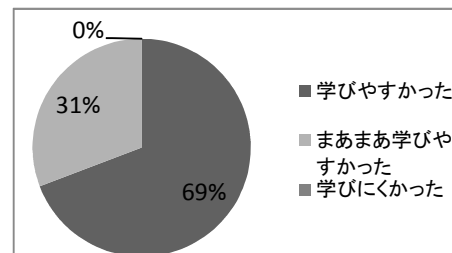


【主な理由】

とてもおもしろかった (28名)	・違いや表現の工夫をたくさん見付けることができた。 ・違いが多く、読めば読むほど考えが深まった。
まあまあおもしろかった (10名)	・それぞれいいところがあっていろいろな考えをもつことができた。 ・二つの文章の違いがよく分かった。
おもしろくなかった (1名)	・文章の量が多かった。

問 3 二つの文章を比較するのは学びやすかったか。

【グラフ 4】



【主な理由】

学びやすかった (27名)	<ul style="list-style-type: none"> ・相違点を見付けやすかった。 ・二つの文章の違いから特徴をつかみやすかった。 ・それぞれ特徴があり、見付けるのが楽しかった。
まあまあ学びやすかった (12名)	<ul style="list-style-type: none"> ・おもしろいが難しかった。 ・比較することで違いが分かった。 ・比較しやすかった。
学びにくかった (0名)	なし

これらの調査結果や生徒の授業後の感想（資料5参照）、授業中の様子等から、建設的に批判する力を高めるために、今回用いた手立ては、豊かな言語生活を営む生徒を育てる上で有効であったと考える。

以下は自由記述で書かせた生徒の感想である。

【資料5 授業後の生徒の感想】

○ 今回の授業はとてもおもしろかった。AとBの二つに分かれ、それぞれの意見を主張し合うところに楽しさを感じた。このようにして楽しみながら授業をつくっていくことで、自分の国語力は上がっているのだと思うと、とてもすごいと感じた。まだまだこの力を高めていけると思うので、これからの話合い一つ一つを大事にしていきたい。(男子)

○ 今回の授業では、まず、ワークシートをしっかりと分析することができた。ペンで分かりやすく印をつけたり、分かったことを書き込んだりすることによって、自分の考えを整理することができるということが分かった。また、グループ活動では、友達と意見を共有し合うことによって、意見がしっかりと固まったり自分の中になかったおもしろい意見を生み出すことができたので本当によかったと思う。あまり発表はできなかったが、他の人が討論しているのを聞いて、自分と同じ意見だったときや違う考えがあったときなど、自分でしっかり考えることができた。(女子)

○ 初めは二つの文章の違いをあまり探せませんでしたが、グループでの話合いで、自分がぜんぜん考えていなかったことに気付くことができました。また、その後の意見交換で、自分の意見に反論がでたときに、その反論を考えるのが楽しかったです。相手から意見がかえってこなくなったときはとてもうれしかったです。最後に二つの文章は同じ新聞の記事ということを知られたときは驚きました。同じ新聞でも書かれているところが違うだけでこんなに文章は変わるということを初めて知りました。今回、二つの文章の比較の方法を学習したので家でもやってみたいです。(女子)

(2) 成果と課題

今回、「比較」を重視した授業を創造して、生徒が学習に積極的に取り組む姿や、意見を構築しながら、互いに広げたり深めたりしていく姿を見ることができた。近年、教師の話を聞くだけという受け身的な授業態度の生徒が増えつつあることや討議・討論を苦手とする生徒が増えつつあることから、本実践のような授業を積極的に行う必要があることを実感した。

また、よりよいものを目指して建設的に批判する活動を繰り返すことによって、生徒に自ら修正したり創造したりする力がつき、生徒の言語生活が豊かになるものと考ええる。

今回は、3年生で行った「読むこと」における授業での実証であった。建設的に批判する力は、一度の授業で身に付くものではない。他の領域、他の学年でも意識して授業を創造していく必要がある。今後、学年の発達段階を踏まえ、系統的、発展的に「建設的に批判する力」を高めることができるよう年間指導計画を工夫していきたい。

VI 終わりに

「言葉が心を育て、人を育てる」とよく言われる。人の生き方そのものに触れ、自分の生き方を顧み、よりよい生き方を模索するきっかけを与えられるのが国語科の授業のおもしろいところである。本研究は、生徒が言葉を的確に使うだけではなく、豊かに使いこなせるようになることが、生き方をも豊かにするという考えに立って行ったものである。

今後更に研究実践を積み重ね、生徒が豊かな言語生活を営むためにはどのような力が必要なのか、そのために、どのような教材、どのような言語活動が適切なのか、また、どのような学習活動を行わせればよいのかを見極めていきたい。

【参考文献】

・井上一郎著 (2001)：語彙力の発達とその育成

明治図書

・市川伸一著(2004)：学ぶ意欲とスキルを育てる

小学館

・中学校学習指導要領解説国語編 (2008) 文部科学省